

### 1. 本園の教育保育目標

保護者の協力を得て、多くの良質な体験を通して自信を持たせ、園児個々の成長目標を達成する

- ・心情(Feeling)の豊かな子ども…「感情表出」「愛情」「他への理解」「申告意欲」「試行意欲」「連帯意欲」「正義感」
- ・態度(Manner)の良い子ども…「挨拶」「謝罪」「感謝」「懇願」「自己責任」「選択責任」「勝者の義務」
- ・自主的に行動(Behavior)できる子ども…「規律遵守」「忍耐」「勇気」「責任感」「委任追従」「自己主張」「自己顕示」
- ・個性(Identity)豊かな子ども…「演出表現」「演技」「言語」「心情表出」  
 「絵画制作」「興味・関心」「集中・熱中」「創造・想像」
- ・健康(Health)な子ども…「運動・体力」「走・跳・投」「泳・潜」「持久意欲」

### 2. 今年度、重点的に取り組む目標、計画

- ・教育理念をベースに向学心・探求心を持ち、新しい挑戦に対して恐れることなく創造的かつ効果的教育技術と革新的な教育プログラムを実施する。
- 個々の職員の意見を尊重し、オープンなコミュニケーションを心がけ、こども園ソレイユの強みを発揮することで地域に愛される園を確立する

### 3. 評価項目の達成及び取り組み状況

評価項目(課題)	取り組み状況
① 教育理念をベースに向学心・探求心を持ち、新しい挑戦に対して恐れることなく創造的かつ効果的教育技術と革新的な教育プログラムを実施する	FAN DAYと称して、月1回1日の活動をお子さま自身が主となり異年齢で過ごす取り組みを実施できた。季節や自然事象に合わせた環境の中で、園庭にてリアルキャンプや遊具と段ボールで秘密基地を作る、水の特性や色の混色、エアードーム設立など科学的要素を取り入れた革新的教育プログラムを実施することができた。さらに、FunThinkuTimeと称して誤嚥・交通ルール・和式トイレの使い方ごみの分別・プライベートゾーンについてなど、お子さまの生活学習を月1回の割合で11回/年間実施できた。
② 個々の職員の意見を尊重し、オープンなコミュニケーションを心がけ、こども園ソレイユの強みを発揮することで地域に愛される園を確立する	4月より各月中堅以上の職員による「重大事故・ヒヤリハット・楽器指導・絵画・運動・保護者対応などテーマに沿った園内研修を10回実施できた。講師となった職員の計画から実践に至るまでの経験は自主性が育まれスキルアップに繋がった。一方で、計画の中にあつた乳児研修(離乳食・神経発達など)については実施できなかったため、次年度の研修要件へスライドする反省点があつた。地域の未就園児やマタニティママ対象のファミリーディ参加者の多くは家族で参加や、ランチを試食をされる方が多かつた。しかし、感染症の流行にて中止した月のあとは参加者が減る現象が起き安定した参加者人数とはならなかつた。このような状況下でR8年度新入園児は定員に達したことは評価に値する。

#### 4. 学校評価の具体的な目標や計画の総合的な評価結果

改革的教育の実践という目標ではFAN DAY(異年齢保育)を月1回実施し、子ども主体のチーム形成・探求活動が定着した。季節・自然・科学的要素を取り入れた活動(リアルキャンプ、秘密基地づくり、水・色の実験、エアドームなど)が創造的教育技術の創出につながった。FUN Think Timeを年間11回実施し、生活安全・社会ルール・自己防衛などの学習を体系化できた。子どもが「自分の身を守る力」を育む教育として効果が得られた。これらは職員の意見が企画に反映され、教育内容の質向上と創造性の発揮につながり、子どもの主体性を軸にした探求的・科学的教育が確立し、園の教育の特色として形になったため概ね達成した。さらに、中堅以上の職員による園内研修を年間10回実施し、講師経験を通して職員の自主性・専門性が向上した。若手職員にとっても身近な先輩から学ぶ機会は教育方針の共有ができ今後の専門性向上のスタートをきった。一方で、園の強みの体系化と外部への発信は十分に成果が出ておらず、次年度の課題として継続する必要がある。

#### 5. 今後取り組むべき課題(次年度へむけて)

課題	具体的な取り組み方法
① 園の魅力が外部に十分伝わっていない。	・月1回のリフレクションで改善点を翌月の実践に反映させ乳幼児の姿をエビデンスとして蓄積(動画・写真・記録)し、職員間で共有する
② AI・ICT化を活用しきれていない。	新しい取り組みやを園だより・SNS・地域連携の場で定期的に発信(最低月1回以上)
③ 専門性を補完し合うチーム体制が十分に機能していない。	全職員が1人1つの専門役割(例:環境構成、ICT、食育、保護者支援など)を担当し、チーム体制強化しさらに質の高い教育を提供する
④	

#### 6. 学校関係者の評価

令和七年度一年を通して、各施設が異年齢での保育・教育に積極的に取り組むことで、年齢ごとの保育・教育では獲得できない領域でのお子様の成長をうながすことができたとの客観的成果報告が多くあった。これら賞賛すべき成果は法人本体と各施設、何より職員一人ひとりが同じ教育保育目標を深く理解して、共感し合ったことにより成し得ることができたものであると考える。

そのため、現場レベルではコミュニケーションが質量ともに高まり、それがベテラン職員と若手職員、法人本部と各施設など垂直的、水平的に垣根を越えて展開されることになったことは、必然性を伴った良い方向での副次的効果であったと言える。

更には、法人が内設する臨床スキル研究所の公認心理師・臨床心理士との連携により、エビデンスに基づいた個別のお子様、集団としての複数のお子様に適応した現場において実現可能な発達支援や心理支援が有機的に行われていたことは、この間の研究投資に対する成果の一つであったと評価できる。

理事会・評議会としては、全国的な人手不足、物価高、少子化といった複合的問題に対して耐えうる収益状況の強化を各施設、職員の方々と協力し合いながら構築していきたいと考えている。

令和8年3月18日 理事会・評議会